

〈私〉の所与性と裂け目 安田百合絵

『塔』九月号の時評で、花山周子が歌集『洞田』を紹介している。『洞田』は、染野太朗・吉岡太朗が不特定多数の人から公募した「駅にまつわる歌」を編纂し「洞田明子」という架空の人の歌集にしたという体裁のもの。少し長いが時評を引用したい。

歌集『洞田』に気づかされるのは短歌における所謂「私性」は、所与のものではないということだ。「私性」は短歌を近代文学として成立させるための担保としてあるときから便宜的に据え置かれているものとも言える。岡井隆はこの点に最も自覚的であったと思う。

この所与性の指摘は、考慮に値するのではないか。文中で言及されていた岡井隆は、批評や評論のなかに会話体の文章を織り込むことがある（『現代短歌入門』の「私文学としての短歌」や同人誌「率」第七号など）が、自己対話という形式それ自体、ある種の「私」のラディカルな問い直しとも言える。「問う私」と「問われる私」が絶えず交替しながら、新たな「私」が錬成されてゆく。読みながら、その生成の過程に読者も立ち会おうのである。それは所与の（あらかじめ自明なものとされている）「私」を疑問視することによって始めて生まれてくる姿勢である。

歌における「私」についても、その所与性を問い直すことができよう。作家論的アプローチという一般に、作家の人生から照

射してある歌や歌集を解釈することが約束になっている。たとえば『若山牧水 その親和力を読む』（伊藤一彦）のなかでは、

・幾山河越え去り行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく

の歌について、「名歌と言われるだけに、どの場所で歌われたかについての詮索が盛ん」であることが解説されていた。文中では、むしろ「どこの場所で歌われたかを消去したところにこの歌の意味があると私は思う。」という意見が説得力ある理由とともに述べられており、完全にその意見のほうに同意したいが、今述べておきたいのは（歌に詠まれた場所を伝記的なアプローチで探るような）「私」↓作品、という読み方と同じように、それとは

逆向きの、作品↓「私」というベクトルがあることも見逃せない、ということである。歌が詠み手によって作られるのと同じように、詠む者の「私」もまた、既に存在した不動のものではなく、歌を詠むという営為そのものによって生み出される。詠うことで絶えず彫琢され続ける以上、作者像としての「私」は所与のものではない。もちろん「私性」と「私」の問題は同一ではないが、「私性」を考えるためには「私」について考えねばなるまい。

それにしても、〈私〉とは一体何なのだろうか。

・うすやみに息をかぞえているわしはわしからわしに架けたわたす橋
・歯みがきをしているわしは歯みがきをされとるわしにつづくほ
ら穴

吉岡太朗 『ひだりききの機械』

『洞田』編集者である吉岡太朗の歌では、「わし」がいわば微分され、瞬間という極小単位にまで還元される。無限になる代わりに、存在論的な裂け目を引き受けたこの〈私〉とは誰なのか、それを考えるには「私性」とは別の視点が必要なのかもしれない。